



長崎ヒバクシャ医療国際協力会（NASHIM）の30周年記念シンポジウムの開催にあたり、一言御挨拶申し上げます。

NASHIMは「在外被爆者及び世界各地で発生している放射線事故による被災者の救済」を目的として1992年に設立され、長崎がこれまで培ってきた被爆者医療の実績、及び放射線障害に関する調査研究の成果を世界の被爆医療に有効に生かしてもらうため、国外からの医師等の受入研修などを実施し、被爆医療を通じ長崎から世界への貢献と国際協力の推進に努めてきました。

特にNASHIMは1986年に発生したチェルノブイリ原子力発電所事故で甚大な被害を受けたウクライナ、ベラルーシ共和国、ロシア連邦、さらには1949年以来セミパラチンスクにおいて核実験が行われてきたカザフスタン共和国において被災者の医療にあたる専門家の育成に注力し、これまでに166名の研修生を受け入れ、研修事業を行ってきました。

私自身も2007年にカザフスタン共和国、2008年にウクライナ、2009年にはロシア連邦を訪問し、NASHIMの研修事業において被爆医療を学んだ人材が現地で活躍していることを目の当たりにすることができました。

またNASHIMは、被爆医療や放射線についての知識普及のために、これまで多くの出版物を発行しています。特に血液学や内分泌学、超音波診断学や病理学といった、被爆医療に密接にかかわる領域の教科書、アトラス等をロシア語で出版することで、旧ソ連邦で被爆医療に従事する医師・専門家の育成に貢献してきました。さらに、2011年3月の東京電力福島第一原子力発電所事故の発生後、NASHIMは放射線被ばくと健康影響についての正しい情報を発信するために、東京におけるシンポジウムを開催したほか、福島における「放射線・放射性物質Q&A」を出版して被災した自治体に無料で配布し、住民の安全と安心の担保に大きく貢献しました。

NASHIMのこれまでの取組は、長崎の特性を生かしながら自治体と医療機関が連携する、いわばオール長崎による国際貢献として、高く評価されてきました。長崎大学はこれまで病院、医学部や原爆後障害医療研究所を中心として研修生の受け入れ、専門家の派遣、教科書の出版といった分野でNASHIMの事業を担ってまいりました。

世界でただ一つの被爆医科大学をその起源の一つとして持つ長崎大学は、これからも長崎県、長崎市をはじめとするNASHIM参加機関と緊密な連携を図りながら、これからも長崎から世界に向けた国際貢献の一翼を担ってまいりたいと思います。

最後になりますが、コロナ禍の中、本シンポジウムを企画、運営されたNASHIM事務局はじめとする関係者の皆様に厚く御礼を申し上げて、私の挨拶とさせていただきます。

本日はおめでとうございます。

令和4年2月20日

国立大学法人・長崎大学・学長 河野茂